

古墳出土鏡の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2013-05-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 三郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14368

古墳出土鏡の研究

小林 三郎

A study of Bronze Mirrors from Tumuli (Kofun) as funeral treasure

SABURO KOBAYASHI

(1) 古墳時代倣製鏡成立の経緯

弥生時代後期の後半に、北部九州地方を中心として、小形の銅鏡、いわゆる「小銅鏡」の一群がみられる。そして、その分布は朝鮮半島南部にまでおよんでいる。小銅鏡は、中国鏡、とりわけ前漢代末期の内行花文明光鏡、昭明鏡、日光鏡などと呼ばれる小形鏡グループの倣製鏡であると考えられている。形式学的な検討の結果からも、その流れを肯定しうるものである。しかし、わが国では、前述のように、その分布が北部九州地方にほぼ限定されるような、「偏在」性を示していることに特徴がある。銅鐸の鑄型の出土例が、近畿地方にも、九州地方にあるのと比較すると小銅鏡の分布の偏在性は、きわめて示唆に富んでいるといわざるを得ない。

日本製青銅器の開始が、弥生時代の前半期に、とくに銅鐸を中心として成しとげられたとする説が定着しつつある。銅剣、銅鉞、銅矛、巴形銅器、銅釧などのものを指している。しかし、銅鏡の国産化開始の時期については、いまひとつ決定的な材料に欠けている。というのは、小銅鏡の分布の偏在性、とくに近畿地方に出土例がほとんどみられないということによる。とはいうものの、国産青銅器全体からみれば、銅鏡の鑄造もその仲間として当然考慮に入れておく必要があるのは勿論である。吉墳時代の倣製鏡と弥生時代の小銅鏡との間を埋める資料は、具体的にはいまのところ何も無いといわざるをえない。

(2) 古墳時代倣製鏡成立期の様相

古墳の成立の時期が、一体いつの事なのかは、いまのところ諸説があって定説がない。およその事として西暦3世紀後半には成立していただろうとする意見が強い。古墳初期の副葬品の中心は銅鏡であるが、それは弥生時代にみられた小銅鏡やその原型になった中国鏡のグループではない。後漢代後半の四神鏡や内行花文鏡を中心と

するものと、三角縁神獸鏡を中心とする、中国三国代のものが中心となり、ことに三角縁神獸鏡が特徴的であることは言をまたない。

古墳時代初期に属する集落遺跡から、しばしば発見される一群の銅鏡がある。重圈文鏡、内行花文鏡などがその代表的な鏡種であるが、鏡式のうえで弥生時代の小銅鏡とは別のものである。銅鏡のもつ性格についても、小銅鏡が墓の副葬品として発見されるのに対して、一方は、集落内にとどまっていた墓の副葬品ではない。いわば、共同体の共有物として集落内祭祀の道具であった可能性がきわめて強いと考えられる。そしてその分布は、九州地方にはきわめて薄く、近畿地方とその周辺地域、関東地方、北陸地方にまでも及んでいて、ほとんどの例が古墳時代初期に限定されているのも特色がある。この現象から考えられることは、底流として弥生時代の国産青銅器の伝統が連続している、即ち、古墳時代社会への革新が明瞭でないことを示していることと解釈される。

(3) 伝世鏡の諸問題

成立期古墳の副葬品の中には、中国後漢代の製作品と考えられる鏡群の一部がみられる。この鏡群は、弥生時代に舶載され、何らかの理由によって伝世され、古墳の成立の段階で伝世の意義を失い古墳に埋納された、と考えられ、いわゆる「伝世鏡」という性格づけがなされている。弥生時代の後期後半には、墓の副葬品として、中国後漢鏡はみられなくなり、いわゆる小銅鏡の副葬がみられるが、この現象は北部九州地方に限定されるものであった。近畿地方とその周辺では、銅鏡の墓への副葬はみられず、銅鏡の出土例のほとんどは、集落内にとどまるという特色を示している。しかも、その銅鏡類は「破鏡」という姿で出土することが多く、割れた鏡の周縁を磨り上げてまでも保有する意義を強く感ずることができ。破鏡の多くは後漢鏡とみられ、一部には前漢鏡をふくんでいる。これらの出土例についてみても、集落の年

代と銅鏡の年代との間に、若干の年代差をふくむものがある。銅鏡のもっている意義が伝世を中心とする性格を示しているとも考えられる。銅鐸などが集落にとどまらないことを考えあわせると、銅鏡のもつ性格が、古墳成立に関して大きな示唆を与える。

一群の伝世鏡が、その伝世を絶って古墳の副葬品として、古墳被葬者とともに埋葬されることは、銅鏡のもつて来た社会的な性質の放棄であり、共同体や集落のレベルを越えた社会的な、あるいは政治的な変革や飛躍を表現しているのではないかと理解される。

(4) 三角縁神獣鏡の登場

成立期古墳の副葬鏡は、前述の伝世鏡と三角縁神獣鏡とが中心である。弥生時代の中では三角縁神獣鏡は、鏡片すらも存在しないから、古墳開始のころ、はじめて舶載された可能性が高い。魏志倭人伝の記載の中に、卑弥呼の中国に対する朝貢の返礼として「銅鏡百枚」の記事がみえ、それが「景初三年」のことであることもよく知られている。この時にもたらされた銅鏡がすべて三角縁神獣鏡であったという確証はない。むしろ、その大半が後漢代のものであって、従って「伝世鏡」を否定的にみる考え方もある。しかし、初期古墳の副葬鏡の中心は三角縁神獣鏡であることは確かなことであり、その輸入と配布は政治的な背景を物語る資料として有効である。初期古墳相互間にみられる同範鏡分有関係は、古墳被葬者群の有機的なつながりを示すものとして注目される。と同時に、三角縁神獣鏡の「古墳成立後の伝世」という新事実とその解釈にも、あらたな問題を提起した。

(5) 倣製鏡の復活——大型鏡の出現

わが国の倣製鏡は、弥生時代の小銅鏡にはじまり、古墳時代初期にみられる内行花文鏡、重圈文鏡を経由して一時、中断するかのように思われる。三角縁神獣鏡の輸入と古墳への副葬が進行する中で、日中関係の中断などがあって、中国製三角縁神獣鏡の輸入も中断した。日本の古墳時代は、しかし、なおその政治的な機構の整備中であつたらしく、三角縁神獣鏡の、とりわけ「同範鏡」は必要な道具であった可能性が高い。古墳時代の倣製鏡の中で、この中国製三角縁神獣鏡の欠乏の間隙を埋めることは、初期政権——古墳を媒介とする政治機構——にとっては具体的な施策として重要であつたらしい。倣製鏡による三角縁神獣鏡の同範鏡の製作と配布は、あらたに同範鏡の分有関係を生み出していった。古墳の、あるいはその文化の進展の第二段階である。同時に、かつて伝世鏡として取り扱っていた四神鏡、内行花文鏡の倣

製鏡が出現する。考え方によっては伝世鏡の復活とも思われるこの現象は、しかし、他に大きな意味が存在しそである。

四神鏡、内行花文鏡に加えて画文帯神獣鏡のグループが倣製される時、「大型鏡」を特徴とするものとして登場する。これは三角縁神獣鏡が、その面径と鏡式において画一的であることと比して、大きな特徴である。同時に、その背景として鑄銅技術の進展も見逃せないことである。大型鏡の分布は、近畿地方を中心とするが、ことに大和盆地（奈良盆地）に集中することが注目される。ことに、盆地中央部に占有する佐紀盾列古墳群、東麓の磯城丘陵に占地する柳本古墳群、西麓の葛城丘陵に立地する馬見古墳群からの集中的な出土例は、西暦四世紀の大和盆地内における三大勢力の分布範囲（日本書紀などの記載による）とも関連をもっていて、初期政権の第二の変革期を示している点で示唆に富んでいる。

(6) 古墳時代の舶載鏡の諸相

四神鏡、内行花文鏡、画文帯神獣鏡、三角縁神獣鏡は、初期古墳の代表的な副葬鏡である。これらを一つのセットとして保有している古墳は、ほとんど近畿地方の古墳に限定されると言っても過言ではない。また、いく種類もの銅鏡をあわせ持つという古墳は、きわめて限定されているということも事実である。四神鏡以下のもののほか、古墳時代の舶載鏡として代表的なものに「斜縁鏡」グループがあげられる。面径 10—15 cm 程度の規模で、四獣、六獣、二神二獣などの文様表現を特徴としている。神獣鏡としては平縁の二神二獣鏡があげられよう。これらはいずれも中国後漢代後半から三国時代にかけての製作と考えられている。これらの銅鏡の重要性は、出土例が多いこと、全国的な分布をみせていること、さらには、倣製鏡の原型としてきわめて大きな役割を演じていることがあげられよう。倣製三角縁神獣鏡や大型倣製鏡の出土例は、その分布や範囲にかたよりのあるが、この鏡群は、全国的な規模の分布を示し、その出土量も多く、またバラエティーにも富んでいる。全国的に古墳が波及して、安定した状況の中で育成された鏡群であるとみてよい。

倣製鏡の原型となっている中国鏡には、龍虎鏡、盤龍鏡、獸帯鏡などのやや特殊なものもある。

(7) 踏み返しによる倣製鏡とその同範鏡

画文帯神獣鏡の倣製鏡には、先述の大型鏡群にふくまれるもののほかに、同系統とみられるが、中国における製作年代の降るものを原型とした倣製鏡とがある。両

者の直接的な関係は、現在のところ明確に把握されていないが、中国でも平縁神獸鏡の一連の変化の中で解釈しようとしていて参考になる。もともと三国～六朝代のものと考えてよく、日本へ舶載される機会は十分にあった。

中国側の文献によれば、東晋安帝の時、倭王讃がいて、宋・武帝の時（A. D. 421）倭王讃が宋に朝貢して除綬を賜う、とみえる。以来、宋・斉・梁代にいたる（A. D. 502）まで倭五王の中国との国交が読みとれる。この間の銅鏡の主流は、平縁画文帯神獸鏡であった可能性は強い。朝貢の返礼としてこの種の銅鏡が下賜されたことも同様に考えられる。埼玉県稻荷山古墳、熊本県江田船山古墳は、刀剣に金銀象嵌による銘文があって注目されている。両古墳に共通する副葬品として画文帯神獸鏡がある。また、九州から関東地方にいたる16基の古墳に同範鏡の分有関係をもつものも画文帯神獸鏡である。この同範鏡は、鋳銅技術の面では「踏み返し」と呼ばれるもので、原型からいく面分かの鋳型をおこす方法によるものと解釈されている。

倭五王の時代に、画文帯神獸鏡を中心とする一群のものがあり、同鋳（同範）によるものによって古墳間の有機的連がりがあったとすれば、西暦五世紀代における日

本国内のこととして、社会的な政治的な動向を把握しうるであろう。

(8) 倣製鏡の終焉・副葬鏡の終焉

西暦五世紀代には、倭五王を中軸とする政治体制があり、中国との国交、朝鮮半島との関係の中で、巨大古墳の時代ともいわれる。倭五王の国際的な動きは、わが国に外来の諸文物をもたらす結果となった。横穴式石室の導入は、追葬観念をもたらし、馬具はそれまでの武具武器にも影響を与え、須恵器は古墳副葬品とはなり得なかった土師器にとってかわって、古墳副葬品の一般的な主役となった。もはや、銅鏡主役の状態は全く覆されたといつてよい。あるいは、本来的に中国志向だった副葬品の選択が、その範囲をひろげたとも表現できようか。

群馬県高崎市綿貫観音山古墳出土鏡の一面は、韓国・百済武寧王陵出土鏡と同範であることを考えあわせると、藤ノ木古墳などとの関連も十分考慮しなければならない。高松塚古墳の海獣葡萄鏡の系譜も、日本がシルクロードの終点としてあるが結果として存在するというだけでなく、隋国との交渉、さらには仏教文化との積極的な接触を予想してもよいのではあるまいか。